

Journal of Chubu University Education

No.17

2017

【実践研究・実践報告】

シェイクスピアの世界への誘い

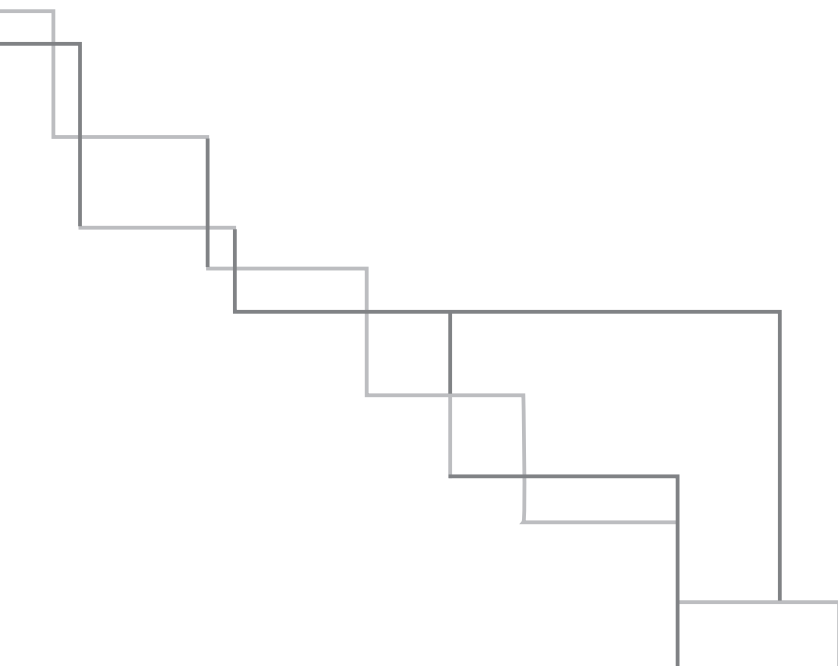
－『ロミオとジュリエット』と『テンペスト』を読む－ 島津信子

【Practical Reports】

Guiding Students into the World of Shakespeare:

Reading *Romeo and Juliet* and *The Tempest*

..... SHIMAZU Nobuko



シェイクスピアの世界への誘い

ー『ロミオとジュリエット』と『テンペスト』を読むー

島 津 信 子*

要 旨

本稿は人文学部英語英米文化学科において、2年生を対象に開講する科目「英米の文学A」で、英文学専攻者ではない学生に対してシェイクスピア作品を教える授業の報告である。授業ではシェイクスピアの戯曲、特に『テンペスト』に触れることにより、文学の学習上で重要な主題解釈への導入教育を行なっている。この授業で取り扱うシェイクスピア劇は二つで、『ロミオとジュリエット』と『テンペスト』である。学生の理解を助けるために、両方とも原作の映画化作品を使用している。授業では映画を視聴させつつ、さまざまな活動を次々に展開して、学生の興味と集中を持続させるよう工夫している。『テンペスト』を取り上げる際には、原作と映画の相違点を比較させつつ、文学作品における主題解釈の多様性を理解させ、社会的・政治的なテキストの読み方についても提示している。さらに、テキストの解釈は読者の手に委ねられており、ゆえに読者のテキストへの積極的な関与が文学鑑賞には不可欠であることを説いている。

キーワード

英文学授業、シェイクスピア入門、『ロミオとジュリエット』、『テンペスト』、主題読解

1 はじめに

英語英米文化学科においては、2年次に「英米の文学」という科目を設けている。春学期には「英米の文学A」、秋学期には「英米の文学B」を開講しているが、その違いとして、学生は「英米の文学A」ではイギリス文学を学ぶのに対して、「英米の文学B」ではアメリカ文学を勉強するということである。本稿は「英米の文学A」という科目の下で、英文科ではなく、英語英米文化学科の学生に、シェイクスピアを教えるという試みについて記すものである。

さて、「英米の文学」という科目はあくまでも英語圏の文化としての文学を取り扱う授業であるので、どこまで深くシェイクスピア作品を取り扱うかという点では限界がある。そして実は、教える私自身もシェイクスピアを専攻した者というわけではない。ただし、アメリカの大学院博士課程において、英米文学の年代別の代表作家の作品について、一連の試験を経てきており、その中には当然、シェイクスピアも含まれている。さらに、修士課程における専門が現代英米演劇だった関係で、ロンドンでの観劇を重ねてきたこと、そして授業で戯曲を取り上げ、学年末の発表会で英語劇上演の指導をしてきたことは事実である。だが、筆者が

シェイクスピアの専門家でないことに変わりはなく、本稿はそのような教員がかなり単純化した形で、英文学専攻者ではない学生にシェイクスピアを教えるという授業の報告であることを明らかにしておきたい。

ところで、映画や漫画、そしてインターネット上の動画なら見るが、本は読まないという学生たちに、そもそも文学を教えることだけでも十分なチャレンジである。それなのに、学生には現代文学よりも馴染みが薄いであろうシェイクスピア作品を、なぜ教えるのかという点について考えを述べたい。というのも、「英米の文学A」はイギリス文学を取り扱い、教職課程履修者にとっては必修科目であるが、その内容についての縛りはなく、担当教員が自由にデザインできるので、シェイクスピアを避けて通ろうと思えば、それも可能だからである。

実際、「英米の文学A」のような科目では、ともすればイギリス文学史上のキャノンと目されている作品を羅列して、その概要を講義することにより、イギリス文学史の知識をつめこむことに傾注する授業展開もありうる。だが、「英米の文学」の授業で、作品の鑑賞なくして、文学史の知識だけを得るとするのは、学生にとっても非常に残念なことだと筆者は思うのであ

* 人文学部 英語英米文化学科 教授

る。それゆえ、学生にはぜひとも実際に作品に触れてもらいたい、それも、シェイクスピア作品を学んでほしいと考えている。

なぜ、シェイクスピア作品なのか。それはシェイクスピアが英文学史上、最高の作家と目されているからということも勿論ある。学生には、シェイクスピアについて名前だけ知っているというのではなく、実際に作品の鑑賞を通じて、なにがしかの知識をもち、シェイクスピアの話題がどこかで出たときには、なんらかの受け答えができるようになってほしいと思うのである。だが、それだけが学生たちにシェイクスピアを学んでほしい理由ではない。なによりも、彼が描きだす人間の弱さや愚かさから、抱腹絶倒なコメディまで、その作品の奥深さと面白さに、ぜひとも触れてほしいからである。要するに、学生にはシェイクスピアを片鱗だけでも味わってから、英語英米文化学科を卒業して行ってほしいというのが筆者の切なる願いなのである。

2 シェイクスピアへのアプローチ

では、どのようにシェイクスピアへのアプローチを始めるのかについて、次に記したい。当然のことであるが、作品に触れる前にシェイクスピアが活躍した時代背景や彼の人生、代表作などについて講義する。しかし、歴史の授業ではないので、要点を述べるに留めざるをえない。まずシェイクスピアの活躍した16世紀後半から17世紀初頭にかけてのイギリスを、エリザベス1世の人生に焦点をあてて解説する。若き女王の下、新興勢力であるイギリスが一躍、世界史の舞台に踊り出た、この時代の躍動感を解説するが、この時代が日本でいえば戦国時代であり、関が原の合戦（1600）や徳川幕府の創設（1603）の時期と重なることを指摘すると、学生にはエリザベス朝がより近いものとして認識されるようである。

さらに、シェイクスピアの人生や代表作品について言及するが、18歳のシェイクスピアが26歳のアン・ハサウェイと結婚を急がなければならなかった事情やその後、単身で故郷を出てロンドンへ向かい、俳優、戯作者、劇団の共同所有者となるまでの彼の軌跡は、常に学生の関心をひく。特に、他の細かいことは忘れても、シェイクスピアの結婚に至るまでの事情を、学生は記憶している。シェイクスピアは「文豪」というより、自分たちと同じように若さゆえの奔放さや愚かさもある人物だったと、彼らは感じるのである。このような「人間シェイクスピア」への親近感をもたせることが、彼らをシェイクスピア作品の世界へと導く第一歩なのである。よって、彼の人生についての紹介は講義には欠かせない部分となっている。

次に、いよいよ作品の鑑賞へ入っていくわけであるが、「英米の文学A」では三つの作品について、各々に時間をかけて講義している。そして、そのうちの二作品にシェイクスピアの戯曲を用いている。それらは『ロミオとジュリエット』と『テンペスト』である。まず、学生たちが学ぶのは『ロミオとジュリエット』である。この作品については、名前だけは聞いたことがあるが、その内容は知らないと答える学生が大半である。なぜ、この作品を選ぶのかは、学生たちの大きな関心事のひとつである恋愛を扱っていて、とにかく彼らの興味と共感を呼ぶ物語だからである。自分たちと同世代の若者たちの恋がどのような結末を迎えるのか、その物語の成り行きにハラハラしながら、学生たちは授業にやってくる。恋の物語であるので、彼らも作品世界に入って行きやすいのである。それゆえ、彼らに対する、いささかのサービス精神も込めて、2年次の春学期に教える「英米の文学A」で取り扱う最初の作品として、『ロミオとジュリエット』を選んでいるのである。

3 作品理解へと導くための授業展開手順

さて、『ロミオとジュリエット』が学生たちの共感を呼ぶ作品であるにしても、それをどう理解させるかはそれほど簡単なことではない。具体的に、どのような方法を用いて教えているのかを以下に説明する。

まず、文学の授業であるから本を読むのが大前提なのだが、それについては昨今の学生の現状から見て、現実的な方法をとっている。つまりは、映像の力を借りるということである。本を読んで、頭の中に自分なりの壮大な絵巻を想像するという大いなる楽しみは、今ではごくわずかな学生にしか求めることのできないものとなっている。そういうわけで、「英米の文学A」の授業においても、取り扱うすべての作品について、映像の助けを借りている。しかしながら、各学期に学ぶ作品のなかの一作品については、映像を見る前でも後でも、時期は学生にまかせるが、必ず原作を読むように求めている。そうは言っても、全員の学生に文学作品の英語の原書をそのまま一冊読ませることができるかと言えば、それは現実的ではないので、日本語の翻訳版を課題図書として指定している。そして学生の読書を確実なものとするために、期末試験の相応の部分を、映画を見ただけでは答えられない、原作の抜粋からの設問にあてるようにして、その旨を学生に対して授業中に繰り返し周知している。というわけで、期末試験への準備があるので、大半の学生たちは授業で指定された原作は読んでおり、この原作を読ませるための対策は機能しているといえる。

このように、「英米の文学A」では原作の翻訳本と

映画の両輪を駆使しているのであるが、後でも再び触れるように、この科目で原作を読むように指定している作品は『テンペスト』である。そして、『ロミオとジュリエット』はあくまでも、文学へ、そしてシェイクスピアへと学生たちを導くための最初の作品として取り上げているのである。

作品理解のために映像の力を借りるに際しては、いきなり映画を見せるのではなく、その前に「あらすじ」を記したプリントを配布している。いわば、最初からネタバレをするわけなので、興醒めなことは否めない。だが、映画を見るだけでは「あらすじ」を追えない学生が多いのも事実であり、「あらすじ」を予め知らせておくのは苦肉の対策なのである。実際のところ、「あらすじ」を読んで映画を見ても物語の流れが理解できない学生もいる。したがって、学生に「あらすじ」を読ませるのは必要不可欠なステップとなっている。

「あらすじ」のプリント配布に関しても、ただプリントを配って黙読させるのではなく、学生にはそれを音読させるようにしている。というのも、「英米の文学A」は毎年履修者が60名前後いる科目ではあるが、教師の一方的な講義とならないように工夫しているからである。その工夫とは、具体的に言えば、学生中心の活動を多く採り入れ、さらに彼らの集中力が継続できる時間を考えて、頻繁に授業内容を変えろということである。「あらすじ」のプリント配布の際にも、隣の席の学生同士でペアを組ませて「あらすじ」を段落ごとに交代で音読させるようにしている。その間、教師は教室を巡回して、学生からの質問に答えながら、彼らがきちんと活動に従事するよう促すのである。

ペアになった「あらすじ」の音読が終わったところで、今度はA4の用紙を配布して、そこに「あらすじ」のプリントから読み取った物語の登場人物同士の関係図を各自で書くように求めている。この作業も順調に書き込んでいく学生がいる一方で、最初の一人、二人の登場人物の名前を用紙に書き入れたままで、なかなか先に進めない学生もいる。前者のタイプの学生は、各登場人物を自分なりに想像して、イラストを添えたりするが、それがかなり上手で感心することがある。「あらすじ」の音読と登場人物の関係図の作成には20分ほどの授業時間をあてることを見込んでいる。当然、全員の学生が関係図を完成するには至らないが、時間がきたところで、それぞれが書いた関係図をペアの相手と見比べて、共通する点や異なる点を話し合うように指示している。

その後で、過去の学生が提出した物のなかで、わかりやすく明瞭にまとめられた関係図をクラス全体に配布している。これは、関係図を完成させて提出すれば、その出来によって加点するという課題に応じた、過去

の学生が作成した関係図であり、工夫されたイラスト入りでオリジナリティにあふれている。つまり、物語の理解のために、現在、履修中の学生たちは先輩の書いた関係図を参考資料として使用するわけで、そのために通常の教材を使うよりも作品に対する親近感をもてるようだ。実際のところ、過去の学生の書いた関係図の有用性を実感するのは、授業中に学生がこの関係図を折にふれて参照しているのを見るときである。

このように、学生に対して「あらすじ」の音読と関係図の作成を行わせた後ではじめて、教師が物語の流れを説明するが、その時間は極力短くしている。学生たちの理解を確認して、これだけは分かった上で映像を見てほしいという点だけに、説明は留めているのである。さて、その後に実際に映画の視聴に入るわけであるが、映画は一気に話の終わりまで見せることはしない。物語の展開にそって、いくつかの部分に分けて、そのセクションごとに1回の授業をあてるようにしている。学生たちに、ゆっくり、確実に理解してほしいからである。前述のように、春学期に2年生を対象に開講している「英米の文学A」ではイギリス文学を取り扱っているが、学生たちにとっては初めての文学の授業となることもあり、取り上げる作品は3つに留めている。そして、その一つ一つの作品に、4～5回の授業をあてるようにしているのである。

次に、映像を見せる前に、物語のセクションごとの内容と、講義で話した背景知識などを理解しているかを問う、5問からなる小テストを配布する。これらの問いには、映像を見ながら答えさせるものもあるので、記述式ではなく、選択式で解答させる問題を出している。一つの作品に対して、3～5回の小テストを実施しており、まず映画を見る前に、隣の学生同士でこの小テストの質問文を交代で音読させて、何に集中して作品を見るべきかの方向性を与えている。その上で、いよいよ映画の視聴に入る。そして、その日の授業で予定している部分を見終わったところで、学生に小テストへの解答の時間を与える。次に、先ほどのペアの学生同士で答え合わせをさせた後で、クラス全体での解答をする。各テストについては、学生各自の理解度をはかるための基準として扱うが、すぐに成績に組み入れることはしていない。だが、これらの質問の中から必ず期末試験へ出題するものがあることは周知している。小テストにより理解すべきことを確認させつつ、仮にその点数が思わしくなくても、そのことにより作品理解への意欲が低下することのないように、このような取り扱いをしているのである。

ところで、私の授業では学生証による機械での出席管理とは別に、各学生にA4用紙1枚を配布して、一学期間を通じての出席表兼成績管理表を作成している。

この用紙を使用して、毎回の出席の記録と授業参加及び受講態度などを記録しているのである。この用紙は第1回授業の折に各自に氏名などの必要事項を記入させた上で、裏面には自己紹介を書かせて、教師として各学生をよりよく把握できるようにしている。さて、小テストの答あわせが終わったところで、学生たちに①その日の授業の「まとめ」と②質問を、この出席表兼成績管理表に記入させている。この作業には概ね5分をあて、書き終わった用紙を回収して、授業を終了する。そして私は、学生の記入した内容をチェックし、それらに対するコメントを付けて、次の授業時に返す。私からのコメントはできる限り学生を励ますことを書くようにしているが、多くの学生が共通して抱いた質問や、作品理解のための鍵となる質問には、「Good Question」とだけ書いて、それらの問いへの回答は次の授業でクラス全体に対して行っている。

翌週の授業では、まず前回の授業で出された「Good Question」についての答を明確にすることから始める。具体的には、「Good Question」のリマークをもらった学生たちに挙手させ、その中の一人をあてて、その質問内容をクラスに紹介するように指示する。そして、その問いに対する答を他の学生たちに問いかけ、彼らをディスカッションへと導くようにしている。最終的には、私の解説をもって解答としているが、このように「Good Question」の紹介とそれへの解答を何回か繰り返すことにより、学生に前回の授業内容を思い出させることができる。そして前回の授業における重要点を確認させると同時に、その回の授業への導入をスムーズなものとするのである。

このような間接的な質疑応答の形式をとる理由は、60名前後というクラスの大きさと、日本人学生に特有の受身な授業態度による。このサイズのクラスで質問の有無を問いかけても、容易に質問者が出てくるわけではない。というのも、他人と違う行動をとって目立ちたくないという傾向が顕著な昨今の学生は、自ら進んで質問をすること、そして意見を発表することを躊躇するからである。そこで、授業の終わりに、その日の重要点をまとめさせ、質問を書かせているのである。勿論、よい「まとめ」を書いた者、「Good Question」を発した者には、それに対する平常点を与え、成績評価の際に考慮するということを、最初にクラス全体へ伝えておく。そういうわけで、平常点でプラス評価をもらいたいという動機もあり、学生たちは相応な真面目さをもって「まとめ」や質問を書く作業に取り組んでいる。また、翌週の授業の冒頭で、「Good Question」をもらった学生は手を挙げるように呼びかけると、他の学生に同じ質問を先に言われないうちに、自分がそれを発表したいという意欲から、学生たちは競って挙

手するのである。しかも、教師から「Good Question」とすでに認められており、見当違いなことを言って「恥をかく」恐れもないので、ためらうことなく、安心して挙手する。

「Good Question」への解答の後は、「まとめ」として注目すべき意見を書いた学生をあてて、その意見をクラスへ紹介させている。さらに、押さえておくべき重要事項について、私自身の解説を付け加えて、作品の一つのセクションの学習を終える。そして、さっそく次のセクションの学習へと入っていくが、その際には小テストの配布、映画の視聴、小テストの解答、出席表兼成績管理表への「まとめ」や質問の記入という上述の手順を繰り返していく。

さらに、同じ作品についての2回目以降の授業では、上記の活動に加えて、学生同士による原作からの抜粋場面の読み合わせも取り入れている。すでに映像で見て、さらに解説も聞いて理解している部分から選択したシーンを、学生同士で読み合うのである。この場面の選択については、作品の特徴を伝えるシーンを選ぶことにしている。例えば、『ロミオとジュリエット』では、例の有名なバルコニーの場面から抜粋した資料を配布して、学生同士のペアでロミオとジュリエットの恋のシーンを朗読しあうのである。資料の台詞は、日本語版と英語版を併記したものを配布している。実際の授業の場では、英語版の台詞については、学生は指導なしではうまく読めないのが、教師の読んだ後にリピートした上で、朗読に臨む。それも、1回のリピートだけでは無理なので、彼らは2、3回のリピートを行った上で読み合わせに挑戦するのである。日本語版の台詞についても、学生は照れてしまっかなか読めないのが、ここでも教師の読んだ後にリピートをして、その後でペアごとに朗読をしている。この活動を観察していると、最初は非常に消極的であった学生がだんだんと朗読を楽しむ様子が見て取れる。

この活動を授業に取り入れているのは、演劇はテキストとして存在するのではなく、声と身体を使ってのperforming artsであり、それを受け取る側も感覚を駆使してあたるべきだと考えるからである。学生にも、シェイクスピアの台詞の面白さは、それを音読してこそ初めて分かるものだと実感してもらいたい。そして90分の授業の間、学生にはできるだけ多くの活動を行なわせたいという思いもある。実際のところ、この台詞の読み合わせは彼らの気分転換にもなっており、積極的な授業参加を好む傾向の強い英語英米文化学科の学生の気質に適した活動といえる。

4 素朴ではあるが本質を突く学生の質問

前述のように、毎回の授業の終わりには「まとめ」

と質問を書かせているが、それらのコメントや質問は素朴ではあるが、本質を突くものが多い。何よりも、どのような意見や質問が出るかによって、学生の理解度を推し量ることができる。そして、それらを吟味することにより、自明のこととして説明を省いてしまうような事柄についても、学生には説明が必要だということに気づかされるのである。ここでは、そんな学生からの質問や意見のいくつかを具体的に示すことにする。

まず、履修生の中に必ず「映画の英語が聞き取れない」という嘆きとも憤りとも取れるコメントがでてくる。これは、TOEIC試験のスコア向上を目指している英語英米文化学科の学生ならではのコメントと言えるかもしれない。そこで、彼らにとって聞き取りが困難な理由として、①シェイクスピア劇の時代の英語が現代の英語とは違っていること、②台詞自体も詩として鑑賞すべき文体で書かれていること、を説明する。特に①については、「英語史」を取り扱う別の科目で、学生たちが学習するはずの事柄である。そこで、「英米の文学A」においても、学生のコメントに答える形で、このことについて言及している。そして、学生たちに上述の『ロミオとジュリエット』から抜粋したバルコニーの場面の音読練習をさせる際に、現代英語とは違う単語やその発音について、具体的に解説している。②についても、このことに言及するのに適した別の場面を例に取り上げ、解説している。

次に、『ロミオとジュリエット』に関して多くの学生から出る質問に、どうして若い二人の恋人たちは親の許可なく結婚できたのかというものがある。結婚とは親類縁者や友人、仕事の関係者などに囲まれて、晴れがましく式を挙げてから始まるものだという観念を、彼らはもっているのだろう。この質問には、キリスト教の宗教的な権威が高く、その影響が絶大であった中世のヨーロッパにおいては、司祭の祝福を受けて、花婿と花嫁の二人だけで結婚するのも可能であったことを説明する。この結婚に関する疑問は、一般的に言って、宗教が日常生活に深く根付いていない現代の日本の学生にとって当然の質問かもしれない。ちなみに、ロレンス修道士とロミオは親子なのかという質問も出たりするが、それはロミオが修道士に対して「Father」と呼びかけるからである。このような質問に直面した時も、西欧文学の作品理解に必要な背景知識として、キリスト教の慣習について、その都度説明していく。

このように、事前知識のなさからくる素朴な質問がある一方で、核心をつくコメントをする学生もいる。例えば、『テンペスト』の授業の際に、主人公のプロスペローについて、領地の統治を弟のアントーニオに任せたまま、自分は魔術の研究に没頭していたのに、

名実ともにミラノ大公の地位を弟に奪われるや、弟を極悪人呼ばわりすることを、「調子良すぎる」という学生がいる。大変な仕事は人に押し付けて、自分は苦勞せずに道楽をやり放題だったのに、弟を一方的に責めるのは「自分勝手だ」というのである。実際のところ、参考資料には、プロスペローが「善」で弟のアントーニオは「悪」だと解説してあるものが多い。だが、この学生はプロスペローを「自分勝手な人物」とする独自の見方を提出したのである。このことは、この学生が作品の単なる「あらすじ」把握の段階から、一歩進んで「登場人物の分析」まで、その理解を深めたことを示している。クラス全体の授業の進め方としても、学生の「あらすじ」理解を推し進めるのが最初の仕事だが、そこからさらに「登場人物の分析」や「主題」の議論に入っていきたい。そこで、こうした独自の解釈を示したコメントは積極的にクラスへ紹介して、プロスペローのキャラクターについて他の学生も巻き込んでのディスカッションへと導いていく。

このように、作品における出来事の把握から、その解釈へと作品理解を深めていくことを目的として、授業中に配る小テストの問題についても、事実確認を問う問題だけに留めず、解釈を問う問題も若干入れている。そうした設問に答えさせつつ、その答えを学生同士で、そしてクラス全体で話し合いながら、学生たちを解釈の段階へと導いていく。

5 『テンペスト』で「主題」を考えさせる

前述のように、「あらすじ」理解から「登場人物の分析」まで、事実把握から解釈へと学生を導いてきて、次に目指すのは「主題」の読み取りである。実際、私はこの三項目についての理解を作品ごとに深めることを、「英米の文学A」の授業目標としている。

さて、「主題」を読み取る訓練をするための教材としているのが『テンペスト』である。この作品については、「英米の文学A」において義務づけている「原作を必ず一冊は読む」という課題用の作品に指定している。したがって、学生は原作と映画化作品の両方を比較しつつ、小テストの解答、抜粋場面の読み合わせ、質問やコメントの提起とそれらのディスカッション等の活動を通じて、作品理解に取り組んでいく。

さて前述のように、「英米の文学A」では学生の作品理解を助けるために、原作の映画化作品を用いている。例えば、『ロミオとジュリエット』の授業では1968年に製作・公開されたフランコ・ゼフィレリ監督による『ロミオとジュリエット』を使用している。他にもある『ロミオとジュリエット』の映画の中で、フランコ・ゼフィレリ版を使用するのは、この映画が原作の時代背景を変えず、作品の舞台であるイタリ

アで撮影を行い、主役を演じる男女の俳優も撮影当時の年齢がそれぞれ17歳と15歳で原作の登場人物の年齢に近い等、比較的、原作に忠実なストーリーの再現をしているからである。したがって、他のバージョンよりもこの映画を視聴するほうが、学生にとって物語を理解しやすいと考えるからである。

一方、『テンペスト』の授業では、原作を翻案した、時代背景や物語の設定がまるで違っている映画を使用している。そのため、学生にとっては映画を見てもすぐに原作の理解の手助けになるというわけではなく、逆に原作と映画の違いに戸惑い、両方の話を混同する者も少なくない。それにも関わらず、原作からかけ離れた映画を使用しているのには明確な狙いがある。その目的とは、つまり、学生たちに原作と映画の違いを深く考えさせることにより、彼らを『テンペスト』の主題を読み取る学習へと導くことなのである。

ここで、「英米の文学A」の授業で使用している映画『テンペスト』について、簡単に紹介しておきたい。この映画はジャック・ベンダー監督の下、1998年にテレビ映画として製作された作品である。老年期にある主演プロスペローを務めるのは、1969年公開の映画『イーザー・ライダー』で主役の若者の一人を演じたピーター・フォンダである。この映画『テンペスト』では、シェイクスピアの原作の骨格は残しているものの、物語の舞台となる場所や時代背景がまったく原作とは異なっている。

では具体的に、原作と映画との違いを見ていこう。まず、物語の舞台はアメリカの南部であり、時代は南北戦争の頃という設定である。以下に話の概要を記すが、当然ながら、登場人物の名前は英語風に変えられている。主人公は裕福な南部の農場経営者プロスペローで、彼は弟のアンソニーに農場の経営を任せて、自分は黒人の女奴隷エゼリからアフリカ伝来の黒魔術を教えてもらうことに熱中するうちに、弟に経営の実権を握られる。さらに、プロスペローは弟に対し、エゼリの息子エアリアルを人道的に扱うよう主張するが、黒人を道具としか思わないアンソニーはそれに反対し、エアリアルを殺害しようとする。この時はプロスペローがエアリアルの命を助けるが、今度はプロスペロー自身が弟により暗殺を企てられる。幸いにも、エゼリの魔術のおかげでプロスペローは命を取りとめて、忠実な使用人ゴンゾの助けを借り、娘のミランダと共に故郷から逃れる。そして、ある沼地へとたどり着くと、その地で黒人奴隷のエアリアルと先住民のワニ男（キャリバン）を支配しつつ、娘の養育に心を砕いて12年が過ぎるのである。そんな折、弟のアンソニーが南軍のスパイとして北軍に近づこうとして、プロスペローの領地を通りかかる。プロスペローは魔術により嵐を起こして弟

に復讐しようとする。その後、様々な出来事の末に、プロスペローは配下の者たちを彼の支配から解き放ち、故郷の農場へ帰る決心をする。彼が解放する者の中には娘のミランダも含まれる。彼女は北軍兵士と巡り合い恋に落ちるが、プロスペローは若者たちの婚約を認め、娘の自立を許す。以上、後半はかなり端折ったが、映画の内容はこのようなものである。

さて、この映画の視聴、さらに前述の授業展開の各段階を経て、学生には作品の「主題」を考えさせる。学生の多くは、『テンペスト』において敵対する登場人物の和解が成立し、若いカップルの婚約を祝して物語が終わることに満足だという。主人公の示す「許し」の美德で劇が大団円を迎えることに、彼らは安堵と心地よさを覚えるというのである。ここで、『テンペスト』の主題として伝統的に受け入れられてきた解釈を、学生に対して解説している。それは青山誠子が指摘するように、長年、人間悪のもとらす悲劇に対して人間の対処すべき道を追及してきたシェイクスピアが、『あらし』に至り、「復讐よりは気高い（nobler）行い」として許しを選ぶ主人公をはっきりと示したとする読み方である。そしてプロスペローは、神のような力や知恵の極致たる魔術（アート）も結局は棄てて、罪と欠点を免れ得ぬ人間同士が許し合い、ただひたすら神に祈る平凡な現実世界へともどっていくという解釈である¹⁾。

この読み方を理解させるために、なぜ映画の背景が南北戦争の時代であるのかを、学生たちに考えさせている。南北戦争はアメリカが国家として経なければならなかった内戦であるが、いつの時代、どこの国においても、同じ国民が血で血を洗う戦争をしなければならないというのは悲劇である。そして、その戦争が人々にもたらす傷は他国との戦争がもたらす打撃よりも、はるかに深く甚大である。なぜならば、これは兄弟の間の争いであり、そのような戦争の残酷さと無意味さは明白だからである。そして、この「内戦とは兄弟の間の戦い」という視点を提起すると、学生たちは原作において兄プロスペローが弟アントーニオを許そうとする心情を理解するのである。

このように、映画における原作との違いを考察することは、学生を主題読解の学習へと導く上で有効であるが、その読み方を伝統的な解釈だけに留めず、他の読み方の可能性についても、原作と映画との比較を通して指摘している。そして、この授業で他の解釈として紹介するのがポストコロニアリズムの批評理論に基づく『テンペスト』の読み方である。朱雀成子が解説するように、元来、プロスペローが支配する島はキャリバンが母親のシコラクスから譲り受けたものであり、プロスペローはかつて弟のアントーニオがミラノ公国

を自分から篡奪したように、この島をキャリバンから奪ったのである。最近のポストコロニアル批評によって、プロスペローは全能者、あるいはシェイクスピア自身と目される高い地位から「篡奪者」という地位に転落させられている²⁾。こうしたポストコロニアル리즘の視点に基づく主題の解釈を示す際も、学生に原作と映画の比較をさせることが不可欠となっている。

では、原作と映画の決定的な相違点とは何なのか。そこに学生の意識を向けさせることが大切で、そのことにより、彼らはポストコロニアル리즘的な主題の解釈を見出し始める。では、実際のところ、この映画が原作と決定的に異なる点はどこかといえば、それは物語の結末でプロスペローがキャリバンに対して、彼の所有地を自らが篡奪したことを認めて謝罪し、その土地をキャリバンへ正式に返還する点である。こうして、映画では主人公のプロスペローが自分を陥れた敵を許すと同時に、自らの罪も認めて謝罪するのである。この主人公の言動はこの映画が製作された当時のアメリカの社会的・文化的風潮と一致するものである。つまり、主人公プロスペローの行動はアメリカで1980年代頃に始まり、1990年代には広く社会に容認されていた political correctness という概念にそったものなのである。

ここで、学生に対して political correctness について説明する必要がある。手元にある小学館の電子辞書『デジタル大辞泉』によれば、political correctness とは人種・宗教・性別などの違いによる偏見や差別を含まない中立的な表現や用語を用いることで、アメリカでは、差別や偏見のない表現は政治的に妥当であるという意味で使われるようになった。黒人をアフリカ系アメリカ人、ビジネスマンをビジネスパーソンと表現するのは、その例である。日本語でも、看護婦・看護士を看護師、保育を保育士などと表現するように改められたことが、これに相当する。言葉の問題にとどまらず、社会から偏見や差別をなくすことを意味する場合もある。日本語への翻訳では政治的妥当性などと訳される³⁾。この説明の後、原作では空気の妖精のエアリアルが映画では黒人奴隷であること、そして原作では邪悪な化け物のキャリバンを映画では白人が演じていることの意図を、学生たちに問う。すると、この映画がポストコロニアル리즘から political correctness へと至る視点に基づいて演出されていることに、彼らは次第に気づいていくのである。

このようなポストコロニアル리즘による主題の解釈について、シェイクスピア研究者の反応はさまざまである。例えば、井出新は、近年、文化的に織り上げられたテキストとしてのシェイクスピアが高い精度で研究され、作品群の社会性や政治性が詳らかにされてい

ることについて、一定の評価を与えながらも、全面的に賛同しているわけではない。井出は、確かにテキストは必ずしも安定したものではないので、批評的に読まれてしかるべきだとしながらも、シェイクスピアの人間性に、そして同時代人たちがシェイクスピアに対して抱いた愛着や敬慕に、光が当てられることの殆どなくなってしまうことを嘆く。そして、作品を批評的に読むことと、作品に他者の知性を見出し、愛情や尊敬を持って読むことは、必ずしも矛盾しないとして、前者のような読み方よりも、むしろ後者のような読み方の重要性を説く⁴⁾。

井出の主張も十分理解できるのだが、この授業でポストコロニアル리즘的な主題の解釈に触れる意味は、文学作品にはいくつもの読み方が可能であり、たった一つだけの正しい読み方というのは存在しないと学生たちに示すためなのである。そして同時に、テキストの読み方は読者の手に委ねられていることを理解させるためなのである。そのことを教えるのに、このアメリカ映画と原作との違いを比較させることが欠くべからざる手段となっているのである。

勿論、この映画の中に原作から取り上げるべきすべての問題点が盛り込まれているわけではない。物語の舞台を南北戦争の頃のアメリカ南部と翻案化したことにともない、映画ではストーリーの簡略化が避けられないものとなっている。したがって、例えば、原作におけるプロスペロー自らが演出する、ミランダとナポリ王子ファーディナンドとの婚約へのプロセスは描かれていない。映画では、ミランダはプロスペローの領地へ紛れ込んだ北軍の傷痍兵士と出会い、彼を看病しつつ恋に落ちるという話になっている。原作のテキストに注目すると、プロスペローがミラノ公国回復のために、娘を政略の手段として利用しているというフェミニズムからの読み方も浮かび上がってくるが、映画ではミランダの婚約に至る詳細は描かれていないのである。このような映画における欠落部分を指摘しつつ、授業では多様なテキスト解釈の一環として、この父娘関係についても言及している。このようにして、作品の主題についてのさまざまな読みの可能性を、学生たちに認識させているのである。

6 まとめ

本稿は英語英米文化学科の学生を対象に、イギリス文学を教える科目の「英米の文学A」において、筆者の行っている授業を報告するものである。

英語英米文化学科の学生たちは英文学を専攻しているわけではなく、英語圏の文化の一端としてイギリス文学を勉強するのだが、その際にぜひシェイクスピアを学んでほしいというのが筆者の心からの願いなので

ある。ここでシェイクスピアの偉大さを列記するつもりはないが、彼こそ真に人間を描くことのできた作家といえるだろう。人間の気高さから矮小さまでを描き、悲劇、喜劇、史劇、そしてダーク・コメディまで自在に書き分け、人間の真実に迫った稀有な作家、それがシェイクスピアなのである。学生はせっかく英語と英語圏の文化を学ぶ機会に恵まれているのであるから、シェイクスピアについても何かを知りえたという誇りをもって、英語英米文化学科を卒業していったほしいのである。そして、シェイクスピア作品の学習を通して、テキストの主題解釈についても理解を深めてもらいたいのである。

上記のような考えから、「英米の文学A」の授業ではシェイクスピアの作品を取り扱っているが、実際の授業では、学生が興味と集中力を失わないように、さまざまな授業活動を次々に展開している。その活動には、「あらすじ」の朗読、登場人物の関係図の作成、映画の視聴、小テストの実施とその解答、抜粋場面の読み合わせ、質問やコメントの記入、それに基づくディスカッション等があるが、その多くは隣席の学生とペアを組ませて行うものである。このような活動を通じて、学生には「あらすじ」から「登場人物の分析」へと作品理解の道筋を示していく。

シェイクスピアの数々の戯曲の中から、この授業で取り上げるのは『ロミオとジュリエット』と『テンペスト』の二つの作品である。『ロミオとジュリエット』はシェイクスピアがそのキャリアの最初の頃に書いた作品である。世界的にも有名なこの悲恋の劇については、恋愛を取り上げていること、そして主人公の年齢が自分たちに近いことから、学生たちは直ちに興味を示す。まさに、シェイクスピア劇への導入を担うには最適の作品だといえる。もう一つの作品である『テンペスト』は、シェイクスピアが単独で書いた最後の戯曲と言われており、彼が晩年に至ってたどりついた人生哲学が反映されている。これらの戯曲を理解しやすくする手助けとして、授業ではそれぞれの映画化作品を使用している。その上で、『テンペスト』については必ず原作を読むことを義務付けている。そして、学生に原作と映画との相違点を熟考させることにより、作品の「主題」解釈へと彼らを導いていくのである。

『テンペスト』においては、この作品の主人公プロスペローが魔術を棄て去る心情と、作者シェイクスピアが長年の執筆活動を終えてペンを置こうとする心境を重ね合わせてテキストを解釈するという伝統的な見方をまず紹介する。それは、人間悪のもたらす悲劇に対して、シェイクスピアは『あらし』において、「復讐よりは気高い行い」として「許し」を選ぶ主人公を描いたとする読み方である。そしてプロスペローは魔術を棄て、罪にまみれた人間同士が許し合い、ひたすら神に祈る現実世界へともどっていくという解釈である。その後、もう一つの解釈として解説するのがポストコロニアリズムの批評理論に基づく『テンペスト』の主題の読み解き方である。それは、プロスペローを全能者としての高い地位から「篡奪者」という地位に転落させる見方である。このポストコロニアリズムの視点に基づく主題の解釈へ学生を導く上で、原作と映画の比較が欠くべからざるものになる。

以上、シェイクスピアを専門に研究したわけではない筆者が、英文学専攻者ではない学生に対して、シェイクスピア作品を取り上げて行う「英米の文学A」における授業活動を記してきた。これらの活動を通じて、この授業で究極的に学生へ伝えたいことは、文学作品にはいくつもの読み方が可能であり、たった一つだけの正しい読み方というのは存在しないということである。同時に、テキストの解釈は読者の手に委ねられており、読者がテキストに積極的に関わってこそ、文学解釈の真の楽しさを実感できるのだということも、学生に理解してもらえるように努力しているのである。

引用文献

- 1) 青山誠子 (2013) 『シェイクスピアいろいろ』 東京：開文社出版
- 2) 朱雀成子 (2006) 『愛と性の政治学－シェイクスピアをジェンダーで読む－』 福岡：九州大学出版会
- 3) 「ポリティカルコレクトネス」『デジタル大辞泉』 (2013) 東京：小学館
- 4) 井出新 (2017) 「シェイクスピアの教室－作品との対話を深めるために」 日本英文学会関東支部編『教室の英文学』 東京：研究社

Guiding Students into the World of Shakespeare: Reading *Romeo and Juliet* and *The Tempest*

SHIMAZU Nobuko*

* Professor, Department of English Language and Culture, College of Humanities, Chubu University

Abstract

This is a report on how I teach a course entitled English Literature which aims to guide non-literature majors into the world of Shakespeare. Among the many plays of Shakespeare, the course deals with *Romeo and Juliet* and *The Tempest*. This paper introduces various class activities in order to help students to understand Shakespearean plays better without losing their interest and concentration. The film versions of the two plays are also used in this course. In treating *The Tempest*, the comparison between the play and the film is indispensable to showing the students how to interpret the theme of the play. In doing so, I urge them to understand that different ways of interpreting the text exist, including studying it from a social and political point of view. By active engagement of the reader according to his or her viewpoint, I also point out to the students how a genuine appreciation of a literary work becomes possible.

Key words

teaching English literature, introduction to Shakespeare, *Romeo and Juliet*, *The Tempest*, interpreting the theme